『比較民俗研究』16. 1999／9

“竜の眼” －資料と短信－
'98アジア民間戯劇・民俗芸能鑑賞及び学術シンポジウム

－河北省武安市固義村の「三爺聖会」の事例から－

周　美華※

1．はじめに

悠久の歴史を経た広大な中国は，多種の民族が存在し，それぞれの民族は独立の文化体系からなる儀礼や芸能を保持している。中国ではこれらの文化要素をすべて「儺」文化と総称してしまうきらいがあるし，過去の文献を根拠にあらゆる文化的要素の起源を「儺」文化に結び付けてしまう傾向にある。このような試みは，あまり実りあるものとは言えない。それよりはむしろ同じ「儺」文化を起源としながらも，各民族間に見られる差異が，どのように生じたのかということを見ていくことの方が意義のあることのように思われる。

また，中国では最近は伝統的な民間宗教の復興に力を入れており，各村落社会の間の人々のコミュニケーションをはるか上で，非常に大きな役割を担っている。周知のように，文化大革命の間，「儺」文化は迷信として扱われ，忘れさられていたが，最近になって，チベット自治区から，黄土高原，雲貴高原，長江中．下流域，とほぼ中国全域に渡って，「儺」文化が存在するという調査報告がされている。その報告書によれば，漢族，チワン族，トン族，プイ族，トンバ族，チベット族，モンゴル族などの間で，「儺」文化が伝承されているということである。

以上のことを踏まえながら，「儺」文化の演劇としての側面だけではなくて，「儺戯」の上演にかかわる多様な民俗文化現象，例えば，上演前に行われる神迎えの儀礼や人生儀礼，生産行事，生産儀礼，信仰習俗などといった側面にも注目しながら，現在根付いている「儺」文化の性格及び在り方を検討していくつもりである。この際，私が今年の旧正月に「'98アジア民間戯劇・民俗芸能鑑賞及び学術シンポジウム」に参加し，実際に河北省に赴き，実施した実地調査の内容について触れたいと思う。

※筑波大学地域研究研究科

2．本　論

2.1.「儺」文化の概念規定

1990年4月，中国山西省臨汾市で中国「儺」文化国際学術討論会が開催された。この討論会では中国国内から百人を越える研究者がそれぞれの論文を携えて参加した。この他にオーストラリヤ，スウェーデン，ドイツ，そして，日本からも十名ほどの研究者が参加した。「儺」文化に関する研究はまだ始められたばかりであったので，この会では「儺」文化の概念規定が問題となった。討論を通じた見解をまとめてみると，「儺」文化の概念規定は次のようになる。

（1）「儺」とは儀礼の一分野であり，除災・招福を目的とし，全体の構成として祭祀が中心となるが，「儺戯」と総称される戯の上演が組み込まれている。

（2）「儺」が実行されるのは，村落の公的祭祀や共同体の願意によることもあれば，個々の家の祭祀や家族の願かけによることもある。

（3）毎年決まった日に行われる場合と不定期の場合がある。

（4）司祭者は，地域社会と深く結びついた呪術を行う宗教職能者であったり，村の特定の家柄の者であったり，特別に司祭者を持たない場合もある。

（5）戯には仮面あるいは仮装を伴うところが多い。

2.2. 中国における「儺」文化の分布について

現時点ではまだ研究が始められたばかりであるので，中国全土に渡る「儺」の文化要素を持った儺戯の芸能の分布図をつくることにとりかかっている状態である。今の段階では，以下のように分類されている。

河北省の「三爺聖会」，四川省の「儺願戯」「陽戯」「師道戯」「梓潼戯」「儺壇戯」，雲南省の「関索戯」「撞童戯」「香通戯」「端公戯」，湖南省の「杠菩薩」「度戒」「儺壇戯」，広西省の「師公舞」「儺舞」，江西省の「跳舞」，安徽省の「儺戯」，江蘇省の「童子戯」「香火神会」，山西省の「扇鼓神譜」，チベットの「蔵戯」などである。

2.3. 事例－河北省武安市固義村の「三爺聖会」

2月10日中国の伝統文化の息づく河北省武安市で，中国儺戯学研究会主催による「'98アジア民間戯劇・民俗芸能鑑賞及び学術シンポジウム」(写真1参照) に幸いにも参加できた。中国国内から百人近くの研究者が参加していたが，この他にも日本，ドイツ，韓国，台湾，ベトナム，オーストラリアなどの国と地域から著名な先生が参加し，河北省武安市固義村を舞台にし，相互の国のあるいは民族の伝統文化の関係について，それぞれの伝統文化の似ているところ，また似て非なるところ，あるいは同源でありながら，それぞれが独立の変容を遂げている点などが議論された。相互の文化交流の営みを明らかにするのがねらいであるのだから，この議論・意見交換が学術的に非常に貴重であろうのみならず，それぞれの地域の相互理解を促進することは間違いないと日本国際交流基金会北京事務所所長特約ゲスト安田文夫所長の方からも指摘があったが，私にとっても現在に至る留学国日本の民俗芸能とも無関係ではないということであるから，さらに興味が湧いてきて，そしてその雰囲気を自ら肌で感じ，固義村の「三爺聖会」を見学できた。河北省武安市固義村（地図参照）の「三爺聖会」について，簡単にまとめてみると，次のようになる。

近年優秀な民間文化遺産の中で，武安市固義村で古い大規模社火儺戯「捉黄鬼」はその古い形式，豊富な内容，国内外の儺文化の研究者に注目された。

写真1　'98アジア民間戯劇・民俗芸能鑑賞及び学術シンポジウム

固義村大型社火儺戯は，神迎え，祭祀，儺儀，隊戯（仮面劇を含める），儺戯及び多種多様な民間芸能形式を一つにする民間文化複合体になる。その中に「捉黄鬼」を中心にする。これは町に出る無言戯，隊戯の範疇に属する。その役は閻魔大王，判官，大鬼，二鬼，跳び鬼及び捉えられる対象黄鬼がある。固義村の儀礼に現れる「黄鬼」には二つの意味がある。一つは肝炎を伝染する疫鬼のことを指す。儀礼の中で，この黄鬼は肌の象徴であり，全身に黄色を塗ることによって，病状を表現している。これは昔の中国の農村で肝炎が蔓延し，死亡者が続出したということに由来している。したがって，黄鬼は儀礼の中で捉まえられ，駆逐される対象であり，古代の「儺」行事における「鬼やらい」の性格を含んでいると言える。もう一つは黄鬼をこの世の道義に背く不孝者の代表と見なし，かれを捕まえ，追い出し，地獄の閻魔大王にきびしくこらしめてもらうという意味がある。この解釈は，恐らく後世につけられたものであろう。この黄鬼を捉えることと極刑を執行することを通じ，及び神迎え，祭祀などの儀礼を行って，農業社会における人々は自然災害と戦い，風調雨順，五穀豊饒，人畜平安，世道安定などの美しい願望を現れる；同時に人々は老人を尊敬し，子供を愛するなどの論理教化を行う。「捉黄鬼」は今300年前の明朝半ばから，本村から出稼ぎの人は河北省潭県の小五台山から教わったものであるという。儺戯の基本な特徴は追い出される役が怖い仮面をかぶる。固義村の儺戯中の神霊も神で作れた固い仮面をかぶる。これらの仮面の役は村民が各種の神霊を崇拝し，隊戯，特に仮面劇の中の主な役である。

固義村の仮面の起源について，固義仮面劇「点鬼兵」の唱詞によると，春秋時期から始まったそうである。

固義村の神迎え祭祀と隊戯の演出の中で，重要な人物がいる－長（掌）竹である。彼は神迎え，神を祭り，神を送るなどの儀礼のなかで各種唱詞の吟唱者，また隊戯の開幕詞，脚本全部あるいは部分の唱詞の吟唱者である。彼は手で60センチの長さ，卵ぐらい太さの竹棒，赤いリボンで縛る，この竹棒を使い，役の上演を指揮する。専門家の考証によると，この竹棒は厄祓い，場を鎮め，演出を順調する役割を果たすという。

隊戯劇目は12ある。その中に仮面劇が8ある。

固義村大型社火儺戯と祭祀儀礼は旧正月14日から17日まで，併せて4日である。14日午前中の儀礼は神迎えである。主に竜王と白眉三郎，白面三郎，東峰三郎を祭る。午後は予備演出する。目的は翌日順調するために，稽古と準備状況をチェックする。15日は本番に入る。神迎え，町で道を並べ，西の広場で演出し，村町でお祝い，午後から演出し始め，晩まで演出する。16日の朝，西社リーダが部分の仮面役を連れて，村南側へ行って虫南王の祭祀を行う。今年は虫の災害が起こらないように乞いをする。それから村の北側へ行って鶏を殺し，竜王を祭る。干ばつ，風，虫などの災害が遭わないように乞いをする。午後，仮面劇「開八仙」などの戯を演出する。その日の夜，村の東側に三つの大きな家は歌舞を演出する。

儀礼の中に直接に演出に参加する人が600人あまりいる。もし，手伝う人を入れると，併せて1000人以上がいるそうである。

また，固義村の「捉黄鬼」の儀礼の中で注目すべきことは「探馬」「閻魔」「判官」「大鬼」「二鬼」「跳鬼」等の役を演じる者があらかじめきめられているということである。これらの役は普通特定の家で世襲されている。例えば，「大鬼」「二鬼」「跳鬼」の役は李姓の家の者が代々受継いできた。したがって，「捉黄鬼」の儀礼には，常に李姓の家の者から誰かを選んで，これらの役に当てる。よその家の者がこの役を勤めることができないのである。し

かし,「黄鬼」の役は村の中でみつけるのは大変難しく，いつもよその村から頼んでつれてくることになる。今回黄鬼の役を勤めるのは山西省からきた29歳李姓の男性である。彼は正月に固義村の「黄鬼」の役を演じるように要請され，行事終了後，彼は300元の礼金を得た。そうすると，祭祀と演出がかかる費用は本村の村民から募金する。社首が村民に実行する原則は金があったら，金を出す。力があったら，力を出す。村民は自分の経済実力によって，金持ちは金を多く出す。貧しい人は少し金を出す。昔足りない部分は25戸の社首が割り勘で出した。今年は日本国際交流基金の援助で2万ドルを出してくれることになっているので，村民が経済的に少し楽になるだろう。

「捉黄鬼」の儀礼が終わると，村南にある「玉皇大帝」の小屋の前で仮面劇が上演される。まず，小鬼が叩頭礼儀をし，「会首」が線香をあげて祈祷する。そして年，月，日，時間を象徴し，東，西，南，北の各方位を象徴する青竜，白虎，朱雀，玄武の四神が仮面をつけて，それぞれ「玉皇大帝」に叩頭礼拝し，踊る。つづいて，仮面劇が上演される。

上演する芝居は，主に「吊四値」「吊四尉」などである。そのうち，例えば，「吊四値」などは，無言劇の形式で，簡単な踊りも伴っている。「玉皇大帝」は，儺儀礼の中で最も重要な存在として位置つけられるが，芝居の上演が専らこの神を慰撫するために行われることから，固義村の儺儀礼に道教の影響を見ることができると言えるだろう。

まとめてみると，固義村の「三爺聖会」は，逐疫.除災.招福の目的を持ち，呪術的な要素が強い。祭祀に直接携わる司祭は地元の宗教職能者であって，儺戯は，その題材を民間に流布する神話や故事にとり，神々に奉納する形で上演される。芸能化がより進んだものほど原義的祭祀要素との癒着度が弱まっている。つまり，祭祀要素との結びつきの強弱の度合は，地域や民族における儺戯の信仰的，社会的な機能の差をはっきりと示している。

3．今後の課題

中国の民間に伝わる儺戯はいわゆる民俗芸能である。その歴史的な展開を考える時，河北省武安市固義村の「三爺聖会」はとても重要な資料を提供してくれるが，幾つかの研究者は日本の芸能の歴史的展開について，次のように述べている。

①折口信夫：「芸能は神様の出てくる祭りからおこり，繰り返されることで芸能化された。」
→（「日本芸能史序説」『折口信夫全集』17，中央公論，1967年。）

②本田安次：「日本の芸能は，神を祭って長命を祈り，五穀の豊饒を願い，疫病の退散を乞う信仰の庭におこり，保存され展開して行った。」
→（「民俗芸能」『日本民俗事典』弘文堂，1972年。）

③三隅治雄：「我が国古来の民俗として，芸能は本来祭りにおける信仰儀礼の一表現であり，したがって，芸能を職とする者もその身分は呪術儀礼を行って歩く宗教者であるとかんがえられていた。」
→（「民俗芸能の歴史的展開」『日本民俗文化大系』7，小学館，1984年。）

この三人の研究者の出張は，中国においてもあてはまり，河北省にはまさに日本の芸能の古来の姿，つまり信仰儀礼ときってもきりはなせない関係にある芸能が見い出せるのである。そしてその芸能を伝承している人々は，やはり呪術儀礼を行う宗教者としての性格を帯びており，儺戯の全体の構成の中でも最も本来の姿を色濃く残していると思われる。今後，祭祀儀礼を中心にし，「民俗芸能に見る日中の鬼－花祭りと三爺聖会の事例から」というテーマを課題として，修論に向け，比較文化の視点から日中文化の特質を検討していきたいと考えている。

参考文献

宮田　登，馬　興国編『民俗』日中文化交流史シリーズ「5」浙江人民出版社　1987

杠　学徳著『燕趙儺文化初探』甘粛人民出版社　1998

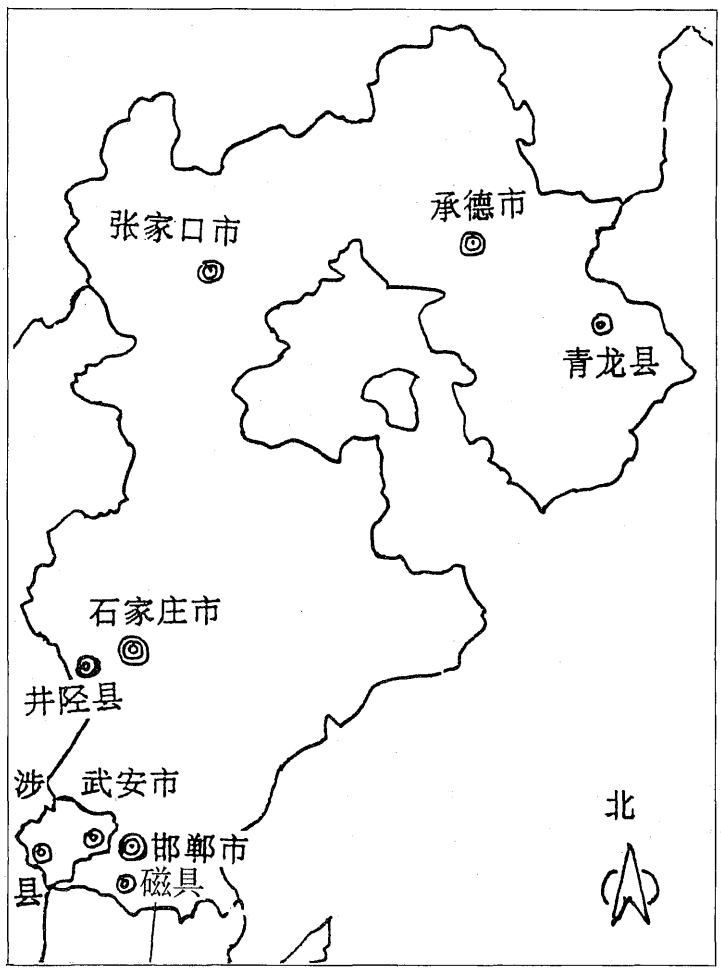
田仲　一成著『中国祭祀演劇研究』東京大学出版社　1981

後藤　淑著『民間仮面歴史の基礎的研究』錦正社　1975

広田　律子著『中国の仮面と祭り』大修館書店　1985

「民俗芸能」『日本民俗事典』弘文堂　1972

「民俗芸能の歴史歴史的展開」『日本民俗文化体系』7　小学館　1984



河北省儺文化分布図